大学による機那サフラン酒本舗 まちづくり活用検討研究　その2

A Study on Saffron-wine brewery house for community development through collaboration of university Part II

渡邉　誠介
WATANABE Seisuke

板垣　順平
ITAGAKI Jumpei

中村　和宏
NAKAMURA Kazuhiro

金　夆洙
KIM Bongsu

キーワード：大学と地域の連携、機那サフラン酒本舗
Keywords：collaboration between university and community, Saffron-wine brewery house

The previous paper focused on the features of collaboration between Settaya-area and NID. In spite of the long-lasting activities by the students, the motivation among participants was declining. We analyzed that's because of the limitation of students' activities. Based on those aspects, this paper focused on the more realistic market which may lead to the utilization of Saffron-wine brewery house which Nagaoka city acquired. Certain parts of the participants of "civic studio" have higher motivation to utilize the spaces through the questionnaire survey.
Moreover, latent capital of Settaya-area, such as abandoned bottles, labels and Senjya-fuda, was investigated. This paper will point out those existences.

はじめに

長岡市摂田屋地域は日本酒醸造メーカー２社、味噌醤油製造会社１社、醤油製造会社１社、味噌製造会社１社、およびリキュール製造会社１社が集中立地している醸造の町である。また1945年の空襲で長岡市が被災した際、空爆エリアからわずかに離れていたために延焼を免れたためこうした醸造関連会社の戦前からの建造物が残されている。そのため摂田屋地区では７棟の国登録有形文化財が立地している長岡市の有形文化財集中立地地区でもある。以上の背景から、筆者らが長岡造形大学が地域連携先の一つとして当該地域に注目することは自明のことであった。

昨年度の本研究第１弾では、当該地区における長岡造形大学の地域連携の一つとして、「地域協創演習」という選択必修授業に注目した。その結果、他の大学の地域連携と比しても長期的に地域連携が継続できていることがポジティブに評価された。その一方、筆者らは、学生の地域に対する関わり方が前例踏襲的になり、結果ルーティン化してしまったと指摘した。もともと授業として学生の第１目的は彼らの学習にある。しかし、学生自身が、地域との関係を模索し躓きそれを乗り越える。また地域の問題を発見し、課題解決を図る、という重要な学習体験を、省力・省略した近々の地域連携のルーティン化にはどれほどの学習効果があったであろうか。結果として参加学生の主体性が失われつつあるという指摘から眺望するに、摂田屋地域と長岡造形大学の地域連携も当該地域と本学との連携の基盤を築く第１段階はほぼ完了したと考える。

大学側からの視点では第１段階では、地域との信頼関係の醸成とともに、安定的なプロジェクト遂行の環境を整備できたことを１番の成果としたい。地域側の視点では、大学の関与によって、国登録有形文化財等の地域資源の発見や活用、地域づくりの意識の醸成や組織の設立・運営が進んだことが成果であろう。またこうした大学・地域連携をベースに街並み環境整備事業に代表される長岡市の行政計画・実施が推進された。第１段階の帰結として機那サフラン酒本舗の土地、建物が長岡市に寄贈され、これらを長岡市が整備活用する方針が明確にされた。市は、まちづくりの拠点という空間を準備する意思を示したことになる。

地域連携の第２段階において、これまでとは異なる形で、参加者に主体性をもたせることが必要である。そのためには、参加者自身の具体的関与が重要であると考えた。第１段階で準備される方向性が明示された空間に、第２段階では、持続性と波及性のある活動を組み込んでいくための主体性を持ったプレーヤーを育てることと引き寄せることが重要であろう。その模索の一つとして、昨年度は地域協創演習にこれまでのルーティンワークではない、新たな試みとして、アップサイクルのプロジェクトを実施した。廃棄物に新たな価値観を付与したモノやモデルの制作をアップサイクルという。機那サフラン酒本舗で参加者自身が見つけ出した破棄ガラス瓶や漆器などが参加者自身の構想力によって照明やテーブルウェアーにアップサイクルされ2018年10月の「おっここ摂田屋市」の機那サフラン酒本舗会場にて展示された。参加者が地域と具体的にかかわる新しい方法論の一端が紹介されたと考えている。

しかしながら、当該の学生は、当然参加者として主体性が一時的にあったとしても、彼らの提案を活用しようという応援者が生まれなければ、このまちづくり拠点を主体的に活用するプレーヤーにはなりない。結果として提案を発表したという点で止まってしまう。

大学と地域が連携する事例として機那サフラン酒本舗のまちづくり活用検討として、主体性をもったプレーヤー候補を探し出すためにはどうしたらいいのであろうか。

１．本研究の目的

本研究では、今後の摂田屋地区と長岡造形大学の今後の連携の在り方について、考察を深めていく第二弾として、長岡造形大学市民工房利用者に対する意識調査を実施・分析する。

長岡造形大学市民工房は、2010年に開設された。１年間４期（１期３か月）で、１期の講座から４期連続の講座まで、内容によって開講期間が異なるが、概ね年間15講座程度が開設され、年間400人から600人が受講している。内容は、ガラスの各種技術、陶芸の各種技術、漆器、テキスタイルなど多彩な内容になっている。参加者は主に子育てが終わられた専業主婦から定年退職された壮年の男女と幅広い。講座も平日開催もあれば、週末開催もある。市民工房というネーミングは、1994年に長岡市を主体として公設民営方式で設立された長岡造形大学（2014年からは公立化）が市民にサービスを還元することを意図したものである。

参加者は長岡市在住者が多いが広く長岡市外からも参加者がいる。

また前年度の地域協創演習で実施したアップサイクル・プログラムに関し、継続的にプロジェクトを実施した結果をまとめる。具体的には機那サフラン酒本舗で発見された「ガラクタ」が地域資源に資するものに展開できる可能性があると考え、データ整理を行った。しかし当該プロジェクトは2019年10月のおっここ摂田屋市が台風10号の影響で中止したことを受け、展示に至らなかった。その代替の活動として、摂田屋地区の調査中に大正時代と想定される大量の千社札のストックが確認された。そこで、この千社札のデータ収集を行い、合わせて地域資源化のための基礎的データとする。

２．市民工房受講経験者意識調査

２－１．プレ調査結果

2018年第３期生において、参加者98名を対象に簡易意識調査を行った。

その結果、「市民工房受講終了後に工房を使用し継続的に作品づくりを希望する者」は96%。「自由に利用できる工房があれば利用を希望したい者」は、92%、と大多数がものづくりの継続とそのための空間活用に積極的であった。

２－２．調査方法

調査期間：2019年12月24日～2020年1月15日

調査対象：長岡造形大学市民工房受講経験者1,133名

調査方法：アンケート票郵送方式

２－３．アンケート票

長岡造形大学　市民工房　受講経験者　アンケート票

Ｑ１　あなたの性別をお知らせください

男、女

Ｑ２　あなたの現在の年齢層をお知らせください

20代、30代、40代、50代、60代、70代、80代以上

Ｑ３　あなたの居住地をお知らせください

旧　長岡市内

旧　長岡市以外の長岡市

長岡以外の新潟県内

Ｑ４　あなたが市民工房を初めて受講した時の理由を下記から選んでください

（とても該当するものに◎を、少しは該当するものに○をつけてください。複数可）

１．もともと造形（ものづくりやデザインすること）に興味があったから
２．友人、知人に誘われたから
３．仲間づくりのため
４．将来、作家として作品を作りたかったから
５．一人で没頭する時間が欲しかったから
６．新しく趣味を持ちたかったから
７．家族に勧められたから
８．長岡造形大学の施設やサービスに興味があったから
９．受講費用が賄える範囲だったから
10. 自宅から通学可能だったから
11. 講師の作品に魅力を感じたから
12. その他

Ｑ５　あなたが受講した講座をお知らせください

（１回のみの受講は○を、複数回受講は◎を付けてください。複数可）

１．とんぼ玉基礎
２．とんぼ玉応用
３．バーナーワーク
４．フュージング
５．ステンドグラス
６．パート・ド・ヴェール
７．キルンワーク
８．シルバー基礎
９．シルバー中級・応用
10. シルバーその他
11. ろくろ初級・基礎
12. ろくろ中級・応用
13. 陶芸応用
14. 陶芸単発（その他）
15. 磁器
16. 乾漆
17. 螺鈿細工・蒔絵
18. 漆器
19. 金継ぎ
20. わっぱ／摺り漆
21. 木の器
22. 手彫り
23. 木工単発
24. 織り
25. 染め
26. その他

Ｑ６　Ｑ５で◎を付けた方のみに質問です。

なぜ、複数回受講したのですか？

（とても該当するものに◎を、少しは該当するものに○をつけてください。複数可）

１．色々な造形物が制作できるようになりたかったから
２．友人、知人に誘われたから
３．とにかく造形、制作能力を高めたかったから
４．いずれプロの作家になることを目指しているから

５．他に何かするよりもこちらに興味があったから
６．継続して制作したかったから
７．その他

Ｑ７　もし、将来市民工房と同様に設備が準備され、窯等も個人で使用できる工房ができたら、利用を希望しますか？
（とても該当するものに◎を、少しは該当するものに○をつけてください。複数可）
１．個人として使用し、作家として制作でき、かつ販売もそこでできるなら希望する
２．仲間と共同で使用し、作家として制作でき、かつ販売もそこでできるなら希望する
３．個人として使用し、作家として制作できるなら希望する（販売は別）
４．仲間と共同で使用し、作家として制作できるなら希望する（販売は別）
５．現在の市民工房で十分なので希望しない
６．もう市民工房も使わないので希望しない
７．すでに個人用の工房を使っているので特に希望しない
８．その他

Ｑ８　今後、Ｑ７に相当する工房が有料で市内に開放された時、使用に際して重要と思われる要素を選んでください。
（とても該当するものに◎を、少しは該当するものに○をつけてください。複数可）
１．利用時間の制限が少ないこと
２．制作シーンを外から見てもらうことが可能なこと
３．制作場所が囲われていて外から見られないこと
４．複数の仲間でおしゃべりしながら作業ができること
５．個室で静かに集中して作業できること
６．その他

２－４．調査結果

回答者数：520 名（有効回答率 46％）

Ｑ１　回答男女比：男性 94 名（18%）女性 426 名（82%）
圧倒的に女性が多い結果となった。

Ｑ２　世代：20 代　4 名（ 1%）
30 代　19 名（ 4%）
40 代　79 名（15%）
50 代　127 名（24%）
60 代　189 名（36%）
70 代　92 名（18%）
80 代以上　9 名（ 2%）

世代は 40 代から 70 代で 93% を占める。特に 50 ～ 60 代が 60% を占めており、子育て後や引退後の人生の第２ステージでの参加が多いことが読み取れる。

Ｑ３　居住地
旧長岡市内　268 名（52%）
旧長岡以外長岡市内　52 名（10%）
長岡以外の新潟県内　196 名（38%）

居住地分類では、旧長岡市内が 52% と半数ではあるが、長岡市外も 38% であり、比較的広域から受講者が集まっていることが分かる。

Ｑ４　市民工房受講理由

この回答は、複数回答が可なので、厳密に分析はできないが、【とても該当】の 53% を占める回答が、「もともと造形（ものづくりやデザインすること）に興味があったから」と最も多かった。続いて 22% が「新しく趣味を持ちたかった」であった。

【少し該当】の回答を見ると、積極的な受講理由である先の２つの理由の割合が減少し、代わりに、「自宅から通学可能だから」「受講費用が賄える範囲だから」という現実的な選択が増える。また「長岡造形大学の施設やサービスに興味があった」という関心・好奇心のポイントも増加する傾向がある。

以上の事から、受講経験者の代表的なイメージは、もともとものづくりやデザインまたは長岡造形大学の施設やサービスに興味があったか、興味があっても時間が割けなかった人たちが、ものづくり、デザインに挑戦しようとする人生の第２ステージに入った 50 ～ 60 代の女性と予想できる。

この代表的イメージに対し、今回の研究対象として注目すべきは、「将来作家として作品を作りたかった」を【とても該当】【少し該当】で上げたそれぞれ 12 名、23 名の計 35 名である。これは全体回答者の６％程度であるが、約 20 人に一人の割合でこうした高モチベーションの受講生がいることは注目すべきである。

Ｑ５　受講講座

特に高モチベーションの受講生だと思われるのは複数回受講している者だと想定し、どの講座に複数受講生が多いか調べてみよう。

結果、トンボ玉基礎 66 名、織り 49 名、トンボ玉応用 45 名が複数回上位となった。１回のみは最も多いのがろくろ・初級の 88 名、逆に同プログラムの複数回は 37 名、応用回は１回は 23 名、複数回は 28 名であった。ガラス系のプログラムは１～７のプログラム、陶芸系のプログラムは 11 ～ 15 のプログラム、と 26 プログラムのうちこの二系統で半分を占める。そして複数回のプログラムを受ける所謂人気プログラムはガラス系、続いて陶芸系といえる。

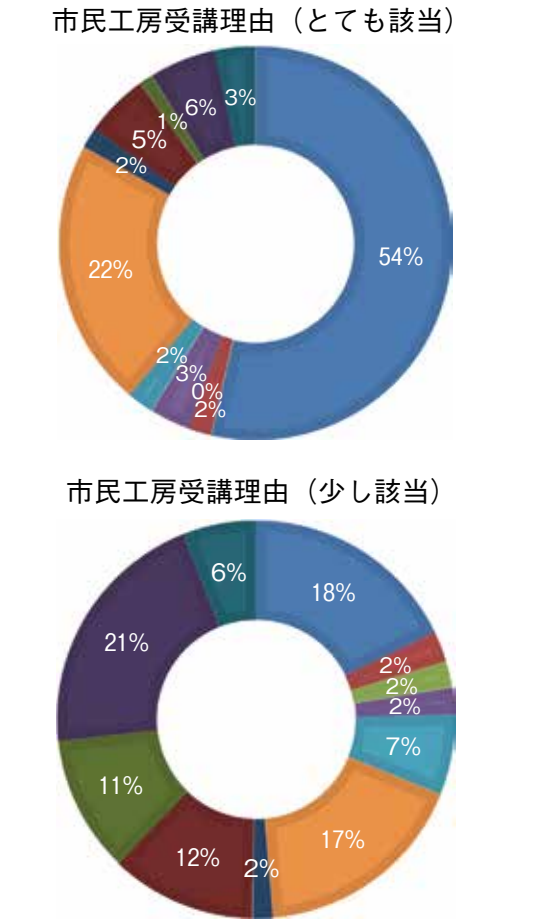


図１　長岡造形大学市民工房受講理由

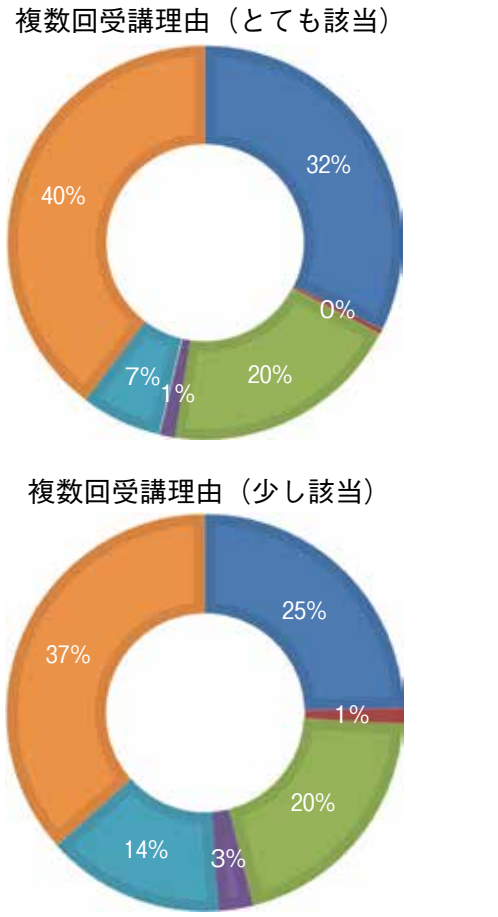


図２　長岡造形大学市民工房複数可受講理由

Ｑ６　複数回受講理由

複数回受講の理由については、「継続して制作したかった」が【とても該当】40%,【少し該当】37% とともに一番多い。続いて「いろいろな造形物が制作できるようになりたかったから」が【とても該当】32%,【少し該当】25% となる。

しかし、「とにかく造形、制作能力を高めたかったから」が【とても該当】【少し該当】ともに 20% であり、複数回受講生の５人に一人は高いモチベーションを持っていることが分かる。

Ｑ７　新施設利用希望

複数回市民工房を受講しているとした回答者に対して、他に同様の施設が準備された際の利用希望と理由を質問した。

結果、35% は特に希望しないと回答した。逆に言うと、複数回受講生の約２／３は、何らかの条件があれば、このような施設を利用したいという潜在的需要があることが分かった。

その条件で【とても該当】のなかで一番多い回答は、「個人として使用し、作家として制作できるなら希望する」が 22%と最も多く、次いで「仲間と共同で使用し、作家として制作でき、かつ販売もそこでできるなら希望する」が 17%、そして「個人として使用し、作家として制作でき、かつ販売もそこでできるなら希望する」が 14%であった。

以上を合計すると53％となり、複数回市民工房を受講する方の約半数には、新施設に対する需要がある可能性があることが指摘できる。

この53％は実数で見ると54名となる。長岡造形大学市民工房を通しての、新施設に対する需要は50名ほどと考えられる。

Ｑ８　新施設での重要要素

こうした新施設が、仮に有料であったとしても利用することになった場合、重要な要素は何であるかを質問した。

その結果、【とても該当】67％（実数112名）を占めたのが「利用時間の制限が少ないこと」であった。【少し該当】では、「複数の仲間とおしゃべりしながら作業ができること」が【とても該当】では11％（実数18名）であったものが26％（実数140名）に増加している。

このことから、新施設に対する姿勢として、ヘビーユーザー（集中して個人として自由に創作したい層）とライトユーザー（仲間と楽しみながら、仲間と自由に創作したい層）の２つの傾向があると思われる。

この点は、共存しづらい傾向であるため、今後実際に「機那サフラン酒本舗」を具体的に活用する際には、慎重に計画することが望まれよう。

アンケートのＱ８の自由記述の混合分析

アンケートのＱ８の新施設を利用する際の重要な要素について、520人中104人が記載した自由記述内容に着目し（有効回答は83）、MaxQDAを用いて記述内容をコーディングした後、混合分析を行った。その結果，「無料駐車場の確保」や「作品の保管スペース」、「休憩室やカフェの設置」、「個人ではとても買えない機械（リソグラフやレーザーカッターなど）の設置」といった設備環境に関するコードが23件あった。次いで、「利用料金が高くないこと」や「費用があまりかからない」などの利用料金に関するコードが22件、「作品等の制作に対して、アドバイスできる人が駐在していたらベスト」や「指導者がいて聞きたいことがすぐ聞ける環境」などの講師や指導の体制に関するコードが15件、使用のルールに関するコードが15件、立地条件に関するコードが４件、施設の用途に関するコードと認知度に関するコードがそれぞれ３件と１件見られた（表１）。なかでも、設備環境に関するコードでは、駐車スペースに関する記述が23件中９件と多く見られた。

これらの混合分析の結果と定量的な分析の結果をそれぞれ比較すると、駐車場の確保や利用料金、講師や指導の体制など、定量分析では見られなかった項目が多く見られた。

一方で、空間的距離については、いずれの分析結果でも突出して見られなかったことから、新施設のインフラ整備が十分に整っていれば、集客が見込めることが窺える。一方で、インフラ整備は大学が独自に進めることは困難であることから、新施設を整備する際の課題ともなる。

表１　Ｑ８の自由記述のコーディング結果

設備環境（23）	ガスや色々な機械も使うので、安全面（保険的なもの）の保証 展示販売ブース・カフェ等のスペースがあるといいです。自分が制作しなくても、ものづくりの雰囲気に浸りに遊びに行きたいです。 休憩室カフェ 設備がたくさんあって使用したいときに使用できること 制作途中の時の作り途中の作品の保管状況… 駐車場が広いと材料を車で運べて良いです。 駐車場も確保していただきたい 防災、火災などの心配、違法駐車など管理が重要だと思う。 駐車場の確保 製作に必要な設備が十分であること 無料駐車場がある事 駐車場が十分にある事 設備が充実していること 駐車場があって利用できること 個人ではとても買えない機械（リソグラフ、レーザーカッターなど）があるといいです。 木工機械を希望します 安全、使用料、カフェ併設、オープンな感じ。 駐車場があること。駅、あるいはバス停が近いこと。 駐車場の有無 作品を保管できるスペースがあること 休憩（お茶を飲んだり）する場所があると製作意欲が継続するのでは（個人で） 販売してほしい 駐車場があること（できれば無料）
利用料金（22）	費用があまりかからないこと 利用料金で使用するかしないか決めたい レンタル料金が適正であること 使用料が安いこと 料金が高いと利用したいと思わない 金額がリーズナブルであること 使用料 安価であること。 金銭面もあると思います 利用料金が高すぎないこと。安いとありがたいです。 できれば今のレンタル工房と同じくらいの低料金で利用できるとありがたいです。 料金が高くないこと 適度な費用 利用料金が比較的安価であること 利用しやすい料金であってほしい 利用料金 使用料等が高めだと回数が少なくなってしまう。 駐車場が必要な街中の場合は３０分無料券を出したり、販売や入場券200円くらいとって会場設営費に当てたりしてはどうか。 費用・料金 料金が高くないこと 利用金額 使用料金が高くならないこと
講師や指導の体制（15）	必要な指導が受けられること 適切な指導・支援をいただけること。休憩タイムにお茶を飲んでリラックスできること 指導してくださる方がその場にいらっしゃればいいと思います 指どうしてくれる講師や職員が常駐、もしくは依頼してその時間のみ在席してくれること 作品等の制作に対して、アドバイスできる人が常駐していたらベスト ある程度、指導者に相談できる態勢が整っていること 指導者（造形大の夜目として、（住分け）連携することが今の市民工房では中途半端？プロ育成の場とはなっているか？） 貸が今よりも快適に仕事をするためには何が必要か考え，それらが市民に好影響をもたらすと嬉しいと感じます 指導者がいること 指導する人がいると良い、もしくはアドバイスしてくれる方とか… 作品作りに困ったとき講師にすぐに聞きたい。 指導者 指導者がいて聞きたいことがすぐ聞ける環境かどうか 講師の指導性レベル アドバイスをしてもらえたら。
使用のルール（15）	独りでの作業も必要なのだが、色々な意見も聞きたい時もあるので、仲間との話しながら確認できる空間であって欲しい 本当に開放されていること。常連のグループの専有のようにならないこと。 一部の人ばかりが利用するのではなく、利用したい人が平等に利用できるといい。 人数制限、時間制限のなこと等予約が取りやすく、利用しやすいならぜひ利用したいです。WS的なイベントもあったらなお良いです。 複数の方と話しながらも個人の制作が充分できること 利用のし方で個人でも使用できたり、グループで利用できたりと選べるといよい。 個室とは限らないが、片隅で静かに。 雰囲気が閉鎖的にならないこと。男性も積極的に参加できるようにする。 工房を利用する際のルールがきちんとしていること 継続できること 仕事を持っている人が気軽に使用できる時間帯であって欲しい。 作品と作者のプライバシーが守られること 一回ごとの制限はあっても良いが利用回数の制限はない方が利用しやすそうに思う 共通のルール お楽しみお友達作りで参加する人とストイックにやりたい人で分けてもらえたらうれしいです。
立地条件（4）	移動距離（自宅からの） 住まいの近くがいちばんの条件です。 通学の便 できれば駅から近い場所か公共交通機関の便の良い場所を希望します
施設の用途（3）	自宅には工房を構えることは難しいので制作する時間をもっと確保出来るならば、現行の施設でもOKです 三条市みたいに廃校を解放して自由に教室を使わせて欲しい。 自宅では他の用事で制作が中断する事が多いので工房に出かける事が集中するために必要です。
認知度（1）	地域からの認知度

表２　Ｑ８の定量分析の結果と混合分析の結果の比較（上位４項目の比較）

Q8の項目	新施設の重要な要素			
選択式	利用時間の制限（39%）	施設の用途（26%）	使用のルール（18%）	設備環境（9%）
自由記述	設備環境（28%）	利用料金（27%）	講師や指導の体制（18%）	使用のルール（18%）

３．地域のキャピタル化を目指した取り組み

地域資源は、「交換価値」や「使用価値」、そして「存在価値」の三つの価値の存在が明示されることではじめて資源として認知され、地域の豊かさに繋がるとされる（中塚2011）。なかでも「存在価値」は、「地域キャピタル」とも呼ばれ、地域固有の発展を目指す際の源泉として位置付けている（池上2009）。本項では、未だ地域資源として顕在化されていないモノ、いわゆるガラクタや雑品を新たな地域のキャピタル化に寄与する活動について報告し、地域資源や地域固有性の可能性について示唆する。

３－１．機那サフラン酒本舗の雑品のアップサイクル活動

３－１－１．アップサイクル活動の概要

この活動では、機那サフラン酒本舗にて学部生や大学院生らがアップサイクル再生素材の探索を行い、地域資源の可能性がある雑品を精査し各自収集を行うものであった。なお、明治時代から遡った歴史的価値があるものか判断がつかないものも数多く存在したため、機那サフラン酒本舗と関わりが深い管理担当者との議論を通じて、先人たちとその廃棄物との関わりについて探った。これらの知見は、今後のアップサイクルの活動を行う上での軸となると考える。

図３　機那サフラン酒本舗にて学生が収集した雑品（抜粋）

３－１－２．宝探しの調査報告

２回にわたる現地での収集数は約 3,000 個となり、酒造メーカーであることから、ガラス類、ラベルなどの紙類が多く、報告では（全体）（紙類）（ガラス）の３つの項目に着眼し調査報告を行った。

この活動では、先ず、地球規模から考えなければならない環境問題を講義およびディスカッション行いながら理解を深め、大切な地域資源と認識した上で主体的に自ら収集をおこなった。地元酒造メーカーからの廃棄物であるため、ラベルやガラス瓶などが中心となったが、むしろアップサイクルの考え方からデザインやモノづくりのアイデアを繋げるストーリーを構築するのには、戸惑いながらもイメージすることが容易であったと考える。今後、各学生がこの経験の中で生まれたストーリーを育て、デザインやプロトタイプを製作する上での軸となりうると考える。

表３　収集品全体の一覧

収集項目	収集数
ラベル・紙類	2,330
ガラス器	165
紙箱	152
瓶類	91
王冠	96
段ボール箱	60
漆器	29
冊子	11
金属器	10
陶器	5
その他	130
合　　計	3,079

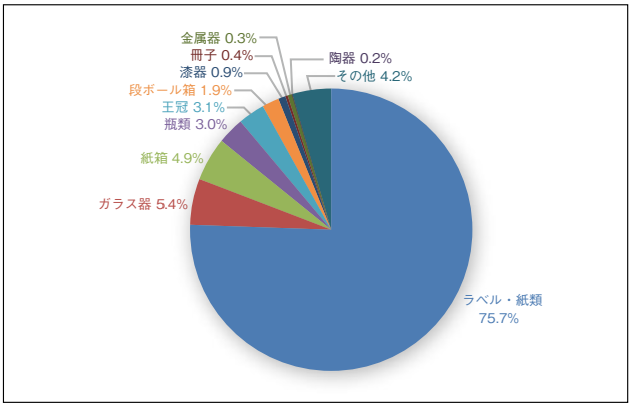


表４　紙類の一覧

収集項目	収集数
ラベル（小）	911
札	865
ラベル（大）	317
包装紙	198
納入通知書	22
ポスター	10
その他	7
合　　計	2,330

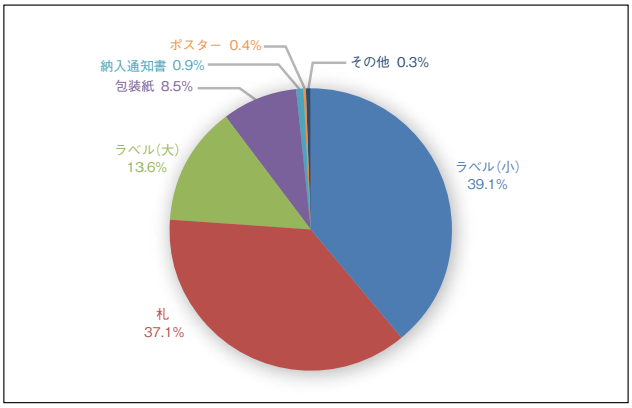
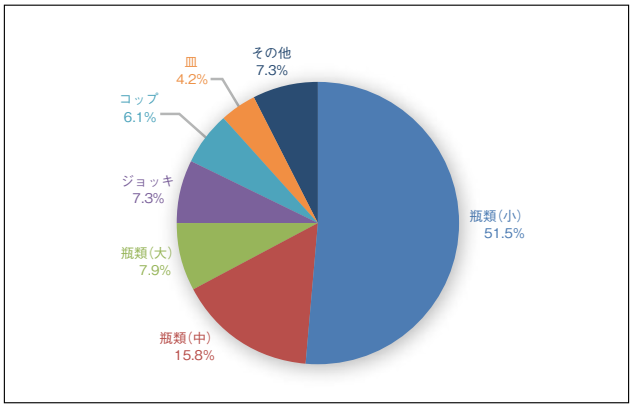


表５　瓶類の一覧

収集項目	収集数
瓶類（小）	85
瓶類（中）	26
瓶類（大）	13
ジョッキ	12
コップ	10
皿	7
その他	12
合　　計	165



３－２　千社札の保存とデータ化

３－２－１．千社札の調査

2018 年に摂田屋の機那サフラン酒本舗を中心に地域資源に関する調査活動を続けていたところ、有限会社星六（味噌星六）の社長である星野正夫氏から、柏崎市に住む親戚が保有する骨董品の中に大量の千社札があり、その千社札を複製して機那サフラン酒本舗に展示しながら教育資料として活用したい、との相談を受けた。現在親戚の方は亡くなられており、千社札のコレクションは地域の歯科医師により保管されている状況であり、調査のために約３分の２の千社札をお借りして本学に持って来ることになった。

３－２－２．岩下コレクションの千社札について

お借りした千社札は、柏崎市の岩下庄司氏が大正から昭和前半にかけて仕事の関係で日本各地を旅しながら集めた約 15,000 枚におよぶ数の千社札である。種類が豊富で保存状態や印刷の鮮やかなものも多い。1963 年の岩下庄司氏の死後（享年 74 歳）、ご子息である岩下鼎氏が長い間しっかり管理して守ってきた。しかし、鼎氏が高齢になったことから、関係の深い歯科医師にコレクションの管理をお願いすることになったという。その鼎氏も 2015 年に亡くなられた（享年 91 歳）。

３－２－３．調査方法

調査期間：2020 年３月 10 日～ 2020 年３月 31 日
調査対象：千社札「岩下コレクション」約 10,000 枚
調査方法：千社札の電子化による制作年・色彩調査

今回の調査は 2020 年３月に行った。作業場所は大学院棟の共同作業スペースで、本学の学部生３名がスキャニングに参加した。高い画質を維持するため基本的に A3 サイズ、800dpi、TIFF 形式でスキャニングを行った。

図４　千社札の保管状況（2018 年３月撮影）

３－２－４．調査結果

今回のスキャン作業は、岩下コレクション約 15,000 枚の千社札調査の第一歩となる調査活動のため、細かい分析は出来ていない状況である。封筒などに書かれた大正時代の年号のものが多数発見できたことで、大正時代前後のものが多いことの可能性が高まった。また、殆どの千社札が木版刷で作られたと推測されるが、約 100 年程度の長い時間が経過したにも関わらず鮮やかな色彩が確認できた。千社札と一緒に郵送の封筒が多数発見できたことで千社札の発行元が徐々に把握できることが期待できる。

図５　実際のスキャン作業データ（2020 年３月作業）

３－２－５．今後の活動計画

今後継続して、残り 5,000 枚の千社札のスキャニングを行う予定である。今後、有限会社星六の星野正夫氏と協議し、成果を発表することを検討している。

４．まとめ

今年度、水流の報告（研究紀要第 18 号「摂田屋まちづくり会社の始動」）にあるように、機那サフラン酒本舗の管理を摂田屋地区の有志を中心として出資されたミライ発酵本舗株式会社が担うことになった。また機那サフラン酒本舗の現存する主要建造物が国登録有形文化財として申請されることになった。今後数年かけて老朽化された部分を補強し、場所によってはリノベーションを図り、長岡の貴重なエリアとして当該施設はまちづくりの拠点として重要性を高めることになる。

本研究では、その拠点の在り方として、長岡造形大学市民工房受講経験者の一定の割合に潜在的に機那サフラン酒本舗の空間の一部を有料の工房として活用する可能性がありうることを示した。

また、地域資源として活用の可能性を有するものが多数当該施設およびその近隣に存在することも指摘した。

今後は機那サフラン酒本舗の土地建物所有者である長岡市およびその管理主体、そして地域の住民や企業等の意向などを調整しつつ、本研究が指摘したデータが示すクリエーター層や潜在的地域資源を、如何に当該施設の活用と連携させるかが重要になるであろう。そのためには、小さな社会的実験を進めつつ検証を繰り返す努力が、すべてのステークホルダーに求められている。

参考文献

中塚雅也，多様な主体の協働による地域社会・農林業の豊かさの創造，農林業問題研究，181 号，49-59，2011
池上甲一，地域の豊かさと地域キャピタルを問うことの意味，農林業問題研究，173 号，3-9，2009